

# 眼底血管異常所見が脳卒中既往例の要介護認知症の発生と関連

## 要介護認知症の調整オッズ比 1.75

認知症は要介護の原因疾患の2割を占める。要介護認知症に至る前に、そのリスクを評価し、進展を阻止する対策の実施が望まれる。横断研究において、眼底血管の異常所見は、高齢認知症患者の認知機能と関連することが報告されているが、要介護認知症の発生との関連を検討した報告はない。

そこで今回、眼底血管異常所見と、その後の要介護認知症発生との関連を検討した。眼底血管異常所見は、Scheie 分類の高血圧性変化1度以上または動脈硬化性変化1度以上のものとした。要介護認知症は、介護認定のための主治医意見書にある「認知症高齢者の日常生活自立度」でIIa（家庭内では支障がない）以上の、日常生活に支障のある認知症状が認められるものとした。

1983～2004年に健診を受診した茨城県協和地区、秋田県井川町の40歳以上の住民約12000人のうち、1999～2012年に要介護認知症と判定された296人（症例群）と、これらの症例と1対2で時点マッチングした592人（対照群）のデータを用いてコホート内症例対照研究を行った。健診データは、要介護認知症の発生より5年以上前に得られたものを用いた。

眼底血管異常所見の頻度は、症例群37%、対照群36%で有意差がなかった。しかし、脳卒中既往例に限ると、症例群（122例）で50%と高く、対照群（244例）の36%との間に有意差が認められた。さらに、要介護認知症と眼底血管異常所見との関連についてロジスティック回帰分析を行うと、脳卒中既往例における要介護認知症の年齢・性・地域調整オッズ比は1.75と高値を示した（図）。両者の関連は、喫煙習慣、耐糖能異常や糖尿病の有無、さらに収縮期血圧や降圧剤服用の有無で調整した場合も同様に認められた。

### <図> 要介護認知症の発生と眼底所見との関連

